



家づくりが育む建築への道のり | 家づくりの感動が建築を醸成する

一級建築士事務所アトリエ4A代表 天野 彰

(第1回/全12回)

この講座をはじめるとあたり

建築界の先輩諸兄をさて置き、半世紀以上ひたすら住宅中心に設計事務所を開業運営した体験と失敗から設計監理業務の実際とその変遷を、私的エピソードを交え建築士の生き方生き様を技術講座として肩肘張らず述べてまいりたい。

建築は住まいづくりの実体験により醸成される

病院、療養施設はもとより工場設計あるいは巨大な体育施設も街づくりも住まいの設計過程で培われる体験から読み解くことができる。そこには人が住み働く建物としてすべての要素elementと事象eventが凝縮されている。

これにより建築設計や都市形成などすべての発想や構成が素直に理解できて誰にも自然に受け入れられる。その反面住宅設計体験のない建物は不思議にそれとわかる。

古都と現代建築

それはある出会いから始まる。筆者が生身の家の設計の栄誉を与えられた、先輩の友人の姉の家だ。そこは九州大分の臼杵だった。このことが建築への情念を掻き立て、後に人生を充実してくれるものとなる。もともとディテールを描くだけの手伝いのつもりが、途中から木造が良いやうこととなり少し経験があった私



臼杵の街情景

にその設計から参画させてもらうことになった。

列車で20数時間揺られ単線の日豊線に入って降り立ったところは、山と海に囲まれ風物を守り通してきた入り江の小さな町だった。民家や造酒屋の軒先が鈍い鉛色のモノクロ映画にタイムスリップしたようだ。漆喰の白と現地で“はいいし”と呼ばれる凝灰岩の石積みと葺。あまりの重厚さとモダンとも思える洗練された伝統の町並みに圧倒され現代建築がいったいどう融合できるか、と戸惑う。初めての体験としてはあまりに苛酷とも言える重荷を背負わされて小さな私は身震いし気も狂わんばかりだった。

幸い敷地は町をやや離れた小高い丘の上にあって独自のデザインは可能そう



臼杵二王座付近



臼杵国宝石仏(摩崖仏)大日如来像

でもあったが、その地の素材感や町の人々の意識から逸脱することは到底できそうにもなかった。

はたしてこの伝統の重圧に耐えられるか。なだらかな傾斜の丘の敷地に立つと、そこにフランク・ロイド・ライトのタリアセン・ウェストの水平線や、あたりの風景に融け込むリチャード・ノイトラのガラス、さらに林に沈むアルバー・アアルトなどイメージが次々と浮かぶ。当時の若者たちの機能主義から有機主義へのメタボリズムなどの呪縛も手伝い若い体質はせっかちにも水平ラインでスケッチを始めていた。それはずいぶん浅はかなことだったと思う。

家族の存在によって始めてその地で家のカタチを醸成する

しかし屈託のない建て主の家族の一人一人と親しくなるにつれ…私のスケッチなど吹き飛んで、風景と地面に沿って一人一人が動き出し、その動きに合わせて間取りと屋根が並ぶようにプランと立面が自然に生まれて来るのだ。地場の“はいいし”の積み石さえもその中に入り込んで来るなど不思議な造形の体験をした。やがて杉の薫りが室内いっぱいになり広がり方言でいっぱいになる。と、建物がまさに地に吸いつくように一体となり息づくのを覚えた。

この感動は半世紀以上たった今日も新鮮で、その後あらゆる場面で支えられ自身も醸成されたようにも思う。建築士は人との出会いとその地の対話でそのカタチを社会に具現化することが職能だと感じる。奇を衒うのではなく新たなカタチや物を求めるのではなく建て主自体が酵母のような存在となって建物を醸成する…。この家づくりの体験の感動こそ大切にしたいものだと思う。



臼杵の街情景写真



臼杵仁王座付近写真



臼杵国宝石仏(摩崖仏)大日如来像写真